第２回県立高等学校将来ビジョン検討会議議事録

日時：平成 26 年７月 30 日（水）14:00～16:00
会場：愛知県三の丸庁舎　２階アイリスルーム

〔教育長開会挨拶〕

〔事務局から委員紹介〕

〔議長開会挨拶〕

〔事務局から資料１～４ページの説明〕

＜議長＞

それでは、議事に入ります。前回は３ページの下にある５つの柱のうち最初の２つについて議論しました。本日は残りの３つの課題について議論を進めていきたいと思います。

先ほど、前回のまとめについて報告していただきました。また後ほど、まとめて議論する機会があれば、抜けていたところについてご発言いただければと思います。ところで、前回東京オリンピックのことでは全然議論しませんでした。オリンピックはスポーツ、芸術、それから国際理解教育の推進という点で利用価値があります。是非、県としても利用を考えていかれたらと思います。東京に一極集中しないようにと県知事も言っていますが、我々もそのことに気をつけていかなければと思います。大学はすでに文科省と協定を結んで、（ＪＯＣと）連携をすることになっています。今後、高等学校にも、ボランティア等の募集の依頼があると思います。オリンピックというのは高校教育の中でも注目すべきよい課題になると思いますので、サッカーのワールドカップのように選手団を愛知に誘致するなどして教育の中に取り込んでいったらいかがでしょうか。国際理解教育の一つの目標にもなると思います。外国語教育を受けた成果を活用する場面がすぐ目の前に来るということは生徒のモチベーションを高めることになります。是非、４ページの国際理解教育の推進の項目のところに追加していただきたいと思います。

まず、始めに「魅力ある高等学校教育の充実」について協議を進めてまいります。資料５ページの検討項目③の「検討の視点」にある「考え方１」から「考え方５」について事務局が資料を用意しています。事務局から資料の説明をお願いします。

〔事務局から資料５ページ及び資料６～８ページの説明〕

＜議長＞

今、ご説明のあった５ページの「考え方」に沿って議論を進めていきます。

まず、教員の年齢層について説明がありました。魅力ある高等学校教育の充実のためには、教員の

指導力向上が課題として挙げられると思います。どなたか、ご意見ありますでしょうか。

＜Ａ委員＞

６ページの資料の表のように、私の学校においても、教職員の過半数が 50 歳代で、その表のとおり 40 歳代の教員は数名です。20 歳代は、ここ４年で新任が 10 人赴任しています。多くの県立高校が同様の状況です。教員の世界では、細かいマニュアルを作って、それに従って仕事を進めていくというよりも、先輩教員が主導権を握りながら、若い教員か先輩から教わりながら覚えていくということが多くあります。したがって、最近の状況下では、長年、各学校で培われてきた指導のノウハウが継承されていかないのではないかという危機感を各学校はもっています。私の学校も担任団が非常に若くなっていますので、校内でのいろいろなケースに対して、どう対応したらよいかを事前に意思統一して、特に若い先生方の疑問に答える形で対応しないといけないということをようやく認識し始めたところです。

私たち 50 歳代も若い頃に大量に採用された世代です。しかし、そのころはそれぞれの学校の努力とは別に、県の働きかけや校長会が中心となって、「グループ研究」等の 20 代、30 代を集めての地域単位での研究会や教科の研究会が、当時は土曜日が課業日であったので、土曜日の午後を活用して開催されていました。そこでは、いろいろな学校の先生方と交流する機会が得られ、学び合うことができました。また、年齢構成もバランスがよく、先輩から後輩へ伝え合うことが組織化されていました。しかし、今はそういったものがなくなり、校内研修と初任研、５年研、10 年研といった決められた研修で学ぶ以外は、なかなか学び合う機会がない点が、私たちの世代との大きな違いでないかと思います。

今後、ますます若い教員が増えて、しかも今は女性教員が多いですので、産休・育休の対応として、臨時的任用教諭や非常勤講師で補っていくことになりますので、さらに教員の入れ替わりが激しくなります。そこで先生方をどのように組織的に育てていくかということは、県立高校だけでなく、高校全体、小中学校も含めた、教育界全体の大きな課題であると思っています。

具体的には、学校間を越えた研究会が組織できるとよいと経験的に考えていますが、費用等、いろいろな面での配慮は必要であると思っています。

また、校舎等の老朽化について是非発言したいと思いますので、後ほど、よろしくお願いします。

＜議長＞

なぜ、このような年齢構成になってしまったか、中間層が薄い教員構成をリカバリーできるのか、事務局にうかがいます。

＜事務局＞

年齢構成の原因は、昭和 50 年代に愛知県に新設高校が多くつくられたことに伴う大量の教員採用にあり、今、その教員が大量に退職しています。新規の採用については幅広い年齢層となっています。各校ではミドルリーダーが不足し苦慮していますが、これに対応するための各校のよい取組を共有することはできます。県総合教育センターでミドルリーダーを育成することに対応した教員研修を考えなければいけないと思っています。

＜議長＞

年齢の高い教員は幅広い教科・科目を指導してきたこともあり、分担して指導できますが、若い教員は数学だけしか指導できないとか、中間層の教員は理科の採用が少なく数学だけが採用されていたのではないのでしょうか。基礎を付した科目が増えていますが、地学などを指導できる教員がいない中、教育の質を担保できるのか心配です。中間層教員の不足を補うことはできるのでしょうか、また、大学がお手伝いできることはないでしょうか。中間層の教員を探したり、免許を持っている人に場を与えたりするなど、中間層がいないという数字だけでなく、中身の問題の検討が必要と思われますが、教育委員会はどのように考えていますか。

＜事務局＞

確かに理科、社会は得意分野があり、各校で工夫していますが、このことについては今後の課題と考えております。

＜Ｂ委員＞

魅力ある高等学校とは、中学生が是非この高等学校へ行きたいという気持ちになることだと思います。この高等学校には素晴らしい指導力を発揮する先生がいるため、是非行きたいと思うのではないのでしょうか。つまり、魅力ある先生がいることが重要です。もう一つは、子ども達は特別な制度のある学校に行きたいと思うのではないでしょうか。目標をもった時に、希望する部活動などのある学校があるとよいと思います。研修を重ねるなどして指導力をもった教員がいることが高校の魅力となります。また、制度による魅力ある学校づくりも大切だと思います。

＜Ｃ委員＞

教員の約半数である 6,000 人が 10 年間で退職していきます。英語に関しては、前回話をしたように地区研修会の中で他校と連携しながら研修が進んでいますが、先生方はあまりにも忙しいと聞いています。果たして教員は足りているのでしょうか、研修を行うためにも教員が充分に足りている状況なのでしょうか。これを検証していく必要があると思います。

＜Ｄ委員＞

魅力ある教育とは何か、という議論が足りないのではないかと思います。中身についての議論ができていません。例えば、グローバル人材とは何かという発言が前回ありましたが、このことについても議論ができていません。魅力ある（教育とは何か）ということが決まっていないと、指導力を向上させるとか、企業と連携する、といった場合に、何をすればよいのか分かりません。個人的な意見としては、社会人になって、後で振り返ったときに、役に立ったと思えるような教育をすることであると考えています。例えば、数学や物理は論理的思考力を学ぶのに役立ちました。国語も相手の言うことを正確に捉え、こちらが言いたいことを伝えるコミュニケーション能力を鍛えることに役立ちました。また、運動部の活動も、忍耐力やチームワークを身に付けることに役立ちました。ただ、スポーツ等の特別なカリキュラムにも魅力はありますが、やはり、大多数の生徒が学ぶ教科教育が充実し、

しっかりしていることが魅力ある教育であると思います。これは私の考えであって、ここにご出席の皆さんは何をもって魅力ある教育というのかという議論が必要です。少なくとも事務局からこれを目指したいという姿を示さないと、手段についても定まったものが出てこないのではないでしょうか。

考え方２についても、例えば、インターンシップを推奨するとしても、何のためのインターンシップなのでしょうか。社会がどんな所かを見ることは大切ですが、インターンシップは、それを通じて、学校で学ぶことへのモチベーションを高めたり、何が自分に足りないのかということを考えたりするためのものです。学校の学びが主体であって、それを促進するためのインターンシップや体験であると考えます。したがって、受け入れ企業の数が足りないという意見もありましたが、まずは学校のカリキュラムのために活用するという考え方に基づいて様々な改善を考える必要があると思います。

また、メールでも意見を伝えましたが、夢はぐくみサポーターとして 814 団体というものすごい数の企業が協力していますが、参加している企業はどのような点にメリットを感じているのか、また、実際に受け入れた後どうであったか、受け入れ数を増やすためにはどうすればよいかなど、今あるものについて、ＰＤＣＡサイクルをしっかりさせていくことで、今後の連携の方向性が出てくると思います。

＜議長＞

重要な視点だと思います。いろいろなプランは出ますが、それがどんな目的でどんな結果を生んだかということは検証していかないと形だけになってしまいます。ここで、資料の４ページにインターンシップや社会人の講話について書いてありますが、今、学んだことがどう社会に役立つのか現場を見ないと勉強する目的が明確にならず、ただ入学試験に合格するために勉強しているだけになってしまいます。

＜Ｅ委員＞

ある方の息子が、市内のレベルの高い進学校に入学しましたが、その学校では１年生でも３分の２は塾へ行っており、その息子は、その塾の授業が面白いと言っているとのことでした。昔は塾に行かずに高校の授業を受けるだけで大学に進学できました。高校のプログラムも大切ですが、教員の力量をいかに高めていくかということも改めて考える必要があります。小中学校の学力検査が全国トップレベルの秋田県を訪問しましたが、教科で優れた先生が 20、30 人位選ばれ、各学校を巡回したり、地区の研修等で授業を実際に見てコーチをしたりしています。優秀な教員であれば定年を延長してでも現場にいていただいてはどうでしょうか。また、校長や教頭のなり手がなくなることも心配されるため、定年を延長してはどうでしょうか。それから、愛知県は生徒一人当たりの教育費が全国で最下位です。教員１人の給料を増やすか、教員の人数を増やすかなどいろいろなやり方があると思います。給与で言えば、民間企業と比較して教員を志す人もいますが、最近のように景気が良くなり、民間の給与が上がっていくときに、優秀な方に教員になってもらえるかという不安があります。

＜Ｆ委員＞

私は、常々、愛知県の県立高校の教育は全国に誇れるものと考えています。魅力のある高校教育についての話ですが、高校で一生懸命やっていることを中学校に知らせていただくことが重要だと思い

ます。以前、自分が中学校の校長として、高校の説明会に参加したとき、高校の教員が中学生の前で授業をしていました。例えば、理科の実験を行い、この学校ではこんな面白いことができると中学生に伝えることで、中学生は高校の魅力を感じます。教員の研修の中にも中高連携といった教員交流を是非進めていただきたいと思います。中学校の教員にも高校に行き、授業を行うなど柔軟な取組があってもよいのではないかと思います。校内研修が、教員の多忙化の中で、なかなか難しいという状況もありますが、柔軟な構えでの研修を行うことで人材育成に結び付くと思います。今、県内では中高一貫の取組をしている学校は少ないですが、少ない中でも教員交流が行われており、この取組を広くいろいろな地域に広げることを期待します。

＜Ｇ委員＞

先ほどの 30 代、40 代のミドルリーダーが欠落していることは 1990 年代のバブル期から始まります。この時代は優れた人材が輩出されたにも関わらず教育界に向かわなかったことになります。40 代で埋もれた人材をどうやって高校教育の場で復活させていくのかという仕組みも考えてはどうでしょうか。魅力ある高校づくりについては、それぞれの高校がホームページをリフレッシュしていく必要があります。また、高校で指導している一人一人の魅力ある先生方の顔が見えるようにしていただくとよいと思います。これによって先生方の自覚も高まり、現場に反映されていくのではないでしょうか。

＜議長＞

ＩＣＴについては愛知県が後ろから７位ということに驚きましたが、教材も教員も必要であることを（本日参加の皆さんは）認識しておられるため議論は不要ではないでしょうか。皆さんも、マナー、セイフティー、セキュリティなど気を付ける点はあるが、ＩＣＴの整備を図ることでよいという意見で異論はないのではないでしょうか。

それでは、施設について議論したいと思います。

＜Ａ委員＞

今のＩＣＴのことも関連がありますが、先ほどのプロジェクターについては、各校に配備されていますが、現状としては充分に活用されていません。そもそも学校の設備そのものがＩＣＴを活用できる環境になっていません。職員室にようやく１人１台パソコンが整備されましたが、電源はタコ足配線でいつ発火してもおかしくない状態です。授業でＩＣＴを活用するにしても、準備のために 10 分間の放課で機器を移動させ、持ち込んだときに授業が始まってしまうなど、設定する時間がないような環境にほとんどの学校が置かれています。全体として県立高校の施設が古くなっています。10 年前に 60 周年を経過した学校が３校改築されて以後、耐震を優先させる必要があったため、全体としては進んでいません。劣化したところは一部校舎を改築することは進められていても、これから築 60 年を過ぎた学校が数多く出てきます。長寿命化を図るにしても一定の手を入れる必要があります。

県立高校でエレベーターの設置されている学校は３校ほどと思われます。多目的トイレの設置してある学校もほとんどありません。ノーマライゼーションが叫ばれながら、公共施設の改善が法制化され、実際に高校に障害のある生徒がかなりの割合で入ってきているにも関わらず、それに対応した施設設備がほとんど整備されていない状況です。車椅子が必要な生徒が入学すると、その学年を常に１

階に置いていますが、その生徒の特別教室への移動については極めて困難をきたしている状況です。すぐに改善できることではありませんが、長寿命化を図るにしても最低限の学ぶ保障ができる環境整備の計画も含めた化粧直しを行い、極端に劣化したところは全改築をするなどの計画方針を県としてできるだけ早く出していただきたいと思います。学校に対してその方向を示していただければ、学校は、壁など劣化している箇所について改修をお願いしていきます。場合によっては保護者の支援をいただくことも含めて考えていかないと、このまま10年、20年、30年経過したとき、昭和50年前後から新設高校が50、60校作られており、そういった学校が40年、50年、60年を経過しようとしているため、これから急激に改修が必要な学校が出てくることになります。できるだけ負担を平準化するためにも、早く改築方針を示していただいて、当面保護者の支援も得られるところでは得ながら、全体として学校間に格差が出ないように配慮していくことがとても大切ではないかと思います。町にある汚い建物は県立高校だとよく言われます。外壁を見ただけで勘弁してほしいというような状態にさえなっている学校もかなりあります。化粧直しを含めて基準を早くつくっていただいて、将来計画を策定してほしいものです。今回のビジョンの中にも是非盛り込んでほしいと思っています。学校の魅力は教員が第１であると思いますが、新設の稲沢特別支援学校を見たときに、新しい明るい学校の中で子どもを育てるのと薄汚れた建物の中で育てるのでは大きく違い、子ども達の学習意欲や先生方の育てようという時代に即した発想はそれなりの新しい環境の中でこそ生まれると思われます。このことは、全県立高等学校の熱い思いとして、将来ビジョンの中に強調してください。

＜Ｆ委員＞

中学生は、今の時期、高校の体験入学に参加しています。参加した子どもたちの意見や感想を聞きますと、「びっくりしましたよ」、「ぼろぼろですよ」という話が出てきます。私も時折、用事で県立高校にお邪魔することがありますが、もう本当に、申し訳ないなと思うところでやってみえるのだな、ということを思います。私学にもお邪魔することがありますが、この格差は開くばかりだなと思います。せっかく意欲をもって高校へ進学する子どもたちであります。是非、好ましい環境の中で、勉学に励んでほしいと思いますので、計画的な改修等を行っていただきたいと思っております。

＜Ｅ委員＞

そもそも教育にかける愛知県の予算が少なすぎるということが一番の問題であると思いますが、もう一つは、これから少子高齢化による労働力人口あるいは、別の言い方をすると税金を払ってくれる人が減って年金を使う人が増えてくるというときに、公的な予算をどのように配分するか、あるいは公共的なサービスをいかに、どのような負担で考えていくかということを、高等学校の場合で言いますと、県立高校の規模なり、数なりを維持していくということになると、若干見直す必要があるのではないかと思います。私も、ある県立高校へ生徒さんが願書を出しに行ったら、あまりにぼろぼろなので私学の方に回ってしまったという話を聞いたことがあります。私学としてはそういうことが一つの魅力になっていると思っています。なぜ私学がそういうことができるかというと、簡単に言うと保護者の負担が一定程度あるからです。だから、格差という形で、公立の学校に比べると立派な建物だったり、真新しかったり、設備も整っているとこういうことになるわけです。県が県立高校に圧倒的にお金をかけるというのであればそれは一つのやり方だと思いますが、そう劇的にお金を増やせる現

状でないとすれば、私立高校の場合は毎年 2,000 人以上の欠員という形で受け入れる余裕があります。持続可能ないろいろな政策をしていく、あるいは、今いる生徒さんたちがどういう環境で学ぶことができるか、ということを考えれば、やはり、公私の負担とか、公費のかけ方、保護者の負担というものを別の形で考える必要もあるのではないでしょうか。

＜議長＞

ありがとうございました。いただいた意見に基づいて、教育委員会としては、県の方に予算の要求と、現場から強い声があると伝えてください。それから、私学のこともよく一緒に考えた上で、施策をお願いしたいという要望が出たことも踏まえて、ビジョンの中に書き込むということもよいと思います。

次の項目に移りたいと思います。「生徒のニーズを踏まえたさまざまな高等学校の適正な配置」ということで、資料は９ページからです。ご説明をお願いいたします。

〔事務局から資料５ページ及び資料９～14 ページの説明〕

＜議長＞

ありがとうございました。話を聞いて、まず、総合学科とはどういうところなのか、昼間定時制とは何なのか、我々の若い頃にはなかったキーワードが出てきますので、もう少し詳しく教えていただけますか。

＜事務局＞

夜間定時制は、おなじみかと思いますけれども、通常夜間、夕方５時半から４時間、４コマの授業を行います。５時半から９時くらいまでにかけて４コマの授業を行うというものでございます。昔は勤労青少年がほとんどでしたが、最近はそうではなくて、中学校を卒業して、全日制高校に行けなかった不登校の生徒、あるいは中途退学の生徒などが多数通っております。

昼間定時制は、名前に「昼間」とありますように、昼間に４時間通います。県立では起工業高校と刈谷東高校の２校がありますが、起工業高校は９時から 12 時半くらいまでの４コマで授業を受けて、そのあと午後にも特別講座を開講しておりますので、この午後の講座をとると通常４年間で卒業するところを３年間で卒業できます。刈谷東高校の方は、Ａコース、Ｂコースというのがありまして、Ａコースは９時から始まって４コマの授業を受けます。Ｂコースの方は少し変わっており、10 時 50 分から始まり、昼に４コマ授業を受けます。通常ですと４年間かけて卒業するところを、刈谷東高校でも２年生からＡコースの１、２、３、４限の授業を受けた生徒は、５、６限の授業を特別にとることができ、Ｂコースの３、４、５、６限の授業を受けた生徒は、１、２限の授業を特別にとることができ、合わせて１日６時間の授業を受けると、３年間で卒業することができます。

不登校の生徒が多いため自分のペースにあわせて４時間で勉強したり、６時間で勉強したりということになっています。昼間に通学しますので全日制高校と似ている雰囲気があって、人気が非常に高くなっています。

＜議長＞

総合学科についてはどういうタイプでどういう人たちを対象に考えているのでしょうか。

＜事務局＞

総合学科は、普通科と専門学科に対して、第三の学科ということで生まれました。専門学科の科目を 25 単位以上開設するということが総合学科の条件になっておりまして、各学校「系列」というものが設けられていて、その系列の中にたくさんの科目群がありまして、そうした科目群の中から、自分は勉強したい科目を選択することによって、例えば普通科高校と似たような学びをとることもできますし、商業高校と似たような学びをとることもできます。鶴城丘高校は、実業高校が母体となっていますので、工業高校と同じような学びをとることもできます。このように、普通科目だけでなくて、体験的な、実習的な科目をとることによって、自分の学びたい分野を学習することができるという学校でございます。

＜議長＞

ありがとうございました。

それでは、ご意見いただけますでしょうか。

＜Ｆ委員＞

今、ご説明がありましたように、昨今、非常に大きな変化があります。特に、不登校児童生徒の増加、あるいは外国人児童生徒の増加、また、発達障害をもった子どもたちの増加が本当に急激に進んでいるという現状があります。そういう現状を踏まえて、魅力ある高校を、そのようなニーズに即して適正に配置していただけるとありがたいと思っております。

一つ質問させていただいてよろしいでしょうか。

現在県立高校で、原級留置となっている生徒は何人ぐらいいるのでしょうか。さらに、今、増えている状況にあるのか、減少している状況にあるのかについてもお願いします。

＜事務局＞

全国の原級留置の状況については、県ごとの情報は非公表になっています。原級留置につきましては平成 24 年が、全国では 12,469 人で、全体の 0.4%です。この数は４年間さかのぼっても同じで、動いていません。本県の県立高校につきましては、その数よりかなり少なくなっています。

＜Ｆ委員＞

様々なこうした問題を抱えている子どもたちも、やはり高校に進学して、そして教育を受けたいと願っている子どもたちが大勢おり、そうしたニーズに応えられるような高校、先ほど説明のありましたステップアップハイスクールのような単位制の高校を増やすことによって、こうした子どもたちや様々なニーズをもった子どもたちが救われてくると思っています。是非、大幅な選択科目の設置であるとか、単位制による運用をしていただけるとありがたいということであります。教育環境、教育条件、教員の配置や教室の設備など、教育条件整備が大変だろうと思いますが、是非、現存する高校で、

そうした単位制の高校が増えるということが、ニーズに合った適切配置に結び付くのではないかと思っています。

＜Ａ委員＞

日本の生徒が外国へ出て行くことも大切ですが、すでに愛知県の中には、大変な数の外国人の子弟がいます。定時制高校も、相当数の外国人生徒がいるわけですが、こうした外国人の生徒が共に生活し、共に学ぶ地域になっているという点において、こうした生徒を受け入れて、地域の人材として活躍できるような学習環境が十分整備されているかという点では、大変遅れていると思います。さらに、企業でのリーダーになるような技術者や、大学の研究者が一定期間日本で研究しようというとき、その方に高校生のお子さんがいたときに、愛知県の高校で十分学習ができるかというと、愛知県では不十分であると思います。いろいろな外国人のお子さんの学習ニーズがあると思いますが、現状では、私立を含めても、必ずしも十分ではないと思います。とりわけ地域に日系人だけでなく、中国やフィリピンやいろいろな国の方々が、たくさんいます。そうした人たちが将来的にも地域の大事な人材として定着して地元の企業で働いていけるような学習環境を県の施策として整えてほしいと思います。外国人サポーターも結果的に国の緊急雇用の費用を使って配置されているので、今年でも夏以降しか配置されないという状況です。やはり、県の責任で県の費用でそういった人材育成にはきちんと手当をするという姿勢が、絶対必要だと思います。そうした人たちがいてこそ、今の産業は成り立っているわけですので、そこのところはもう少し行政だけでなく、企業からもいろいろなサポートをしていただけるとよいと思います。

＜議長＞

12 ページのグラフにも書いてある愛知県が高校 172 人ですか、中学校 1,613 人と書いてありますが、これは、来年は 500 人ぐらい高校に入学してくるということになるのでしょうか。このことへの対応というのは何か考えておられるのでしょうか。

＜事務局＞

全日制で受け入れている人数は、50 人台、そして定時制でも 100 人を少し超えたところですので、中学生、中学校３年生全体の日本語指導が必要な外国人児童生徒のほんの一部であるということです。

＜議長＞

そうすると、本来は公共の教育としては対応できるスタイルをとっていかないといけないということですね。日本人の場合は中学から高校へ 100%に近い、高い割合で上がるわけですけれども、それと同じように教育を受けられるような準備がまだできていないのでこういう数字にとどまっているということなのでしょうか。

＜事務局＞

平成 14 年度から、こうした外国人生徒への対応も県の施策として続けておりまして、広げてきてはおりますものの、今、まだこの段階であるということであります。今後、こうした子どもたちの学ぶ

場というものをどうしていくかということを検討していかなければいけないと思っております。

＜議長＞

日本語教育のできる教員の確保が必要になってくる可能性があります。18 歳人口が減ってくるというときに外国人が少しずつ入ってきて、それを補う形という部分はあると思います。だからそういう中で高校教育もある程度変わっていかないと対応しきれないかなという気がします。

＜Ｈ委員＞

平成４年から労働力としてブラジル人が入ってきまして、平成７年、８年ころからどんどん増えていったのです。それで入管法が改正になって、日系の方は日本の労働力として、受け入れていくという門戸が広がってきて、一気に入ってきました。ある学校は 150 人います。就学義務はありませんが、日本の学校で受け入れます。本当なら、賃金を安くして労働者を迎え入れる企業が、保育所などを設置するなど、彼らの子弟の教育の部分も請け負ってほしいものです。企業は企業で労働者として受け入れますが、その子どもは居住している自治体で面倒をみるというのは、おかしな話であるということを何度も言ってきましたが、改善されません。かなりの税金を使って、外国人の子どもたちに様々なことをやっているのです。さらに、最近変わってきたのは、長期滞在と永住化の傾向です。この傾向になると、子どもたちは就学年齢を越えてしまいます。中学校３年生を越えてきたときに、この子どもたちがこの日本の社会の中でどういう職業について、どのように自分の人生設計を立てていくのか、その部分が、連れてくる親も本人たちにもないのです。日本の上級学校への制度は、どうしてもペーパーの入学試験というものを通過しなくてはいけません。そうすると学習日本語と生活日本語では全然レベルが違います。生活日本語はできるけれども、学習日本語となるとだめなのです。そういう壁があるから、資料にありますように豊橋西高のように、５、６人、これは大学の先生の子弟や優秀な子どもたちが行くと思いますが、他の子どもたちの何人かは定時制に入学します。そうでない子たちは、結局、次の進路という部分について今一番悩んでいます。このことが、愛知県の課題の一つであると思います。

＜Ｉ委員＞

検討項目４の考え方６について、質問させていただきます。中高一貫教育は、３つの実施形態があります。愛知県の考え方としては、連携型中高一貫教育のさらなる中山間地域においての設置を望んでいるだけで、他の２つのタイプは考えていないという理解でよろしいでしょうか。

＜事務局＞

中高一貫教育については、今ご指摘のように３つの形態がありますが、今、連携型というのを山間部等で２組やっていまして、非常によい形で、動いております。中等教育学校及び併設型につきましては、今のところ計画はありませんが、そのことも含めて、ご意見をいただけましたらと思います。

＜Ｉ委員＞

愛知県は公立王国と言われていまして、公立高校でも高校に入ってから大学入試に十分間に合うと

いうことで、中等教育学校や併設型タイプの必要性が上がってこないのかもしれませんが、公立のトップレベルの高校に入学するようなお子さんたちは、中学校の勉強は３年間もかかってやるような勉強ではないというようなことがあり、そういうレベルの子たちは中高一貫の私立の学校を選ぶしかないという状況になっています。そういう能力の高い子たちは高校に入ってからで大丈夫ということで終わってしまうのですが、前倒しで勉強できる環境を整えて、高校の３年間、大学受験ということではなく、大学と連携して、もっと高度な研究等を経験をさせることも大切なのではないかと思います。是非、中等教育学校や併設型タイプの学校の設立も考えていただければと思います。

＜事務局＞

それぞれの形態でメリット・デメリットがありますので、いただいたご意見も踏まえて、今後検討をしていきたいと思います。

＜議長＞

他府県ではいくつか例があるので、メリット・デメリットをきちんと評価した上で進めるか進めないかを考えていただければよいと思います。実験校という考え方はあるかもしれません。

〔事務局から資料５ページ及び資料 15～17 ページの説明〕

＜議長＞

愛知県としましては、人口はこの２、３年がピークという理解でよろしいですか。

＜Ｊ委員＞

2015 年がピークです。予測ですけども。

＜議長＞

そこから先はどんどん減っていくということですね。

＜Ｊ委員＞

地域的なアンバランスはあります。

＜議長＞

先ほど、ご指摘があったように、生徒が減っていくときにどういう募集人員にするかというのは、全体で議論しなければいけないことだと思います。その中で教員の数も含めて、これはまさに大学の方でも言われていることで、これから 18 歳人口が 120 万から 100 万ぐらいに減っていくと、そういう中で同じ定員でよいのかという議論があります。愛知県の高校の場合は、流入する人口もあるので、ピークは遅くなると思いますが、全国的にはもうすでに減り始めています。今日のこの議論では、特に地域における対応ということを課題に掲げていますが、高校の現場ではどのようにお考えですか。

＜Ａ委員＞

東三河地区の減少が相当厳しい状況にあるということが第１の課題だと思います。尾張地区でも、地域によっては増える地域と東三河ほどではないけれども減少する地域はあります。尾張地区は名古屋市が真ん中にありますので、私学も含めて比較的生徒の移動が激しいので、何らかの形でバランスが取れてくるように思います。しかし、東三河については、これだけ生徒数が減っていきますと既存の学校の学級数を単純に減らしていく場合でも、特に山間部では、既に学級数がかなり少ない状況にあります。そこのところも勘案したときに、やはり地域として何らかの学校、高校があることで、若い子たちがそこにいて地域の活性化につながるという視点があります。前回の再編整備のときにもこの地域は話題になりました。しかし小さな学校がいくつかあってもやはり活力面で劣るとなれば、ある程度、場合によっては学校を統合して、施設設備も含めた新しい学校を地域に提供することで地域の皆さんに理解をいただくという選択肢も含めて、その地域の声を十分踏まえて、この東三河地域の学校の在り様を検討することが必要ではないかと思います。交通の事情等、この地域独特のいろいろな条件もあると思いますので、将来的な計画も含めて、これらの課題も勘案して、この東三河地域の高校の在り方は考えていただきたいと思います。それから、先ほどの外国人の問題もありますし、既存の学校をそのままというよりも、総合学科に改編したり、その地域独特のニーズに応じた部分をその学校の特色として取り入れたりと、いろいろな工夫もしながら、併せて施設設備の改善をして、10年先を見据えて、この地域全体のニーズに合った学校配置の計画を作っていただき、順次地域の理解を得ながら計画の実施に向けて動かしていくということが必要ではないかと思います。これはなかなか難しい問題ですので、まずは地域の声を十分踏まえていただくということを第一にお話しいたしました。

＜Ｃ委員＞

人口が減少していきますので当然、施設、それから人の効率的な配置、これは絶対に必要になってくると思います。効率的にやるということを前提にしながら、非効率にならないということが基本的には大前提の議論であると思います。しかし、一方で人口が減少していくことを食い止める、あるいは人を呼び込むっていう場合には、一方で教育の質をいかに維持していくか、いかに魅力的な地域にしていくかということも重要になってくると思います。やはり重要なことは、今日冒頭で議長が「今後10年先を見据えたビジョンを」ということを言われましたけれども、この地域が今までもってきた強みをいかに維持、強くしていくかということを考えると、やはり基礎学力をきちんと維持していくべきです。もともと公立高校が全国的に非常に強い地域ですので、この状況を維持していくことが、重要になってくると思います。そのためには、やはり私はあまり総合学科がどうかという話よりも、基礎学力をきちんと身に付けられるような体制を整備していくことが求められていると思います。施設と人については効率的に配置していくということですが、施設についてはどうしようもない部分があると思います。しかし、人については、例えば英語の教育をするにしても、ＪＥＴプログラムで来た人たちを特定の学校だけで活用するのではなく、複数の学校で活用していくとか、効率的に供給体制を整備していくということができるのではないかと思います。一方で少人数になるわけですから人口が少なくなっていくとこれまで以上にきめ細かく教育を提供できるとか、体験型の学習ができるとか、非常によい部分もあります。しかし、私が危惧しているのは多くの人がいなくなることによって、

競争的な意識というのがどんどん薄れていくことです。つまり、全国の中で自分自身がどれくらいの順位にいるのかということを常に意識できなくなってしまう、自分が客観化されにくい状態になってしまいます。人口減少に伴って効率的な施設とか人の配置を行う一方で、ＩＣＴ等、いろんなものを使いながら、自分がどれくらいのポジションにいるのかということを、例えば全国の様々な模試に高校が参加したりしながら、常に競争環境を維持していくという装置を組み込んでいかないとだめだと思います。ですから繰り返しますが、基礎学力をいかに維持していくのかということが、この愛知県では非常に重要な命題であると思います。

＜Ｅ委員＞

人口の減少が著しい学校については、一つの大きな社会政策として考えたらどうかと思います。鹿児島県の大隅半島の方で、山村振興のために古い学校を改築して、全国から生徒を集めて、全寮制で学校を始めました。名古屋でも説明会が実施されました。それからもう一つは、島根県の離島で、全国から生徒が集まり、島が大変活気づいた例があります。人口が減っていく地域では、そこでしか享受できない豊かな価値というのがあり、そんな学校をたくさん作るということは難しいと思いますが、愛知県にとって、この設楽の地域を財産だと考えれば、そういう特別な学校を１校、２校創ったらどうでしょうか。それほどたくさんの生徒が集まるという感じはしませんが、思い切って社会政策として作ると、そこの人口減少を食い止めるということよりも、一定期間そこで過ごすことで、今後のその人たちが将来、都会へ出て行ったり、外国へ出ていったりするかも知れません。そのようなことを味わえる学校を作ることに、取り組んだらよいかなと思います。

＜Ｃ委員＞

生徒の減少地域の対応ということですが、安部総理が重要視している「女性の活躍促進」ともう一つの「地方の活力」、特に地方の人口減少をどうやって食い止めるか、人口減少下でどのように地方の構造を見直すのかということがあります。例えば、国交省が拠点都市構想を打ち出し、経産省も地方の中でのネットワークをどうやって作っていくのか考えており、愛知県でもそういったことを踏まえて、どういった県づくりをやっていくのかっていうことを考えていると思います。それで、教育の話になるとどうしても、教育だけは別であるようなことを言われるのですが、愛知県全体の都市構想の中でこれをどう位置づけるのかという検証も絶対に必要だと思います。

＜Ｆ委員＞

連携型の中高一貫校ですが、これはもともと田口高校や作手高校の存続のための施策で始まったものであると思います。いろいろと中学校等の取り組みを聞く中で、高校がその地域の中に入り込んでいくという努力をされています。その中で特色ある高校の教育活動、あるいは魅力ある教育活動をされており、この高校に入りたいという思いを、中学校も進路指導の中でしっかりと押し進めているということがあります。しかし、実際のところ、全員がその地域の高校に入学するかというと、そうとも限らないわけで、優秀な子どもたちは、豊橋や岡崎の高校に入学するということもあります。こうした高校に、他地域から子どもたちを呼び込んでいく取組を、しっかりとしていかないといけません。その高校のメリットを、県としても打ち出していく必要があると思います。もっと魅力あるメリット

を中高一貫の施策の中に盛り込んでいただけるとありがたいと思っております。

＜議長＞

それでは、これで、今日の会議を閉じますが、いろいろな意見が出てきました。それらを是非、盛り込んでいただきたいと思います。今日の最初の魅力ある高等学校教育の充実というところが、実はいろいろな幅広い課題を含んでいるので、前回の所の課題に組み入れていくことも考えられます。どちらかというとこのテーマはソフトやハードウェアの充実という点にありますが、今日の会議では、どうやって魅力を出すかというところに意見がたくさん出てきています。例えば「スポーツを魅力あるものにしたらどうだ」、これは前回のところにも入る話ですし、それから「企業との関わりについてもチェックをしながらフィードバックをかける」というようなことでキャリア教育のところにその意見が入っていくと思います。それから、競争環境においても、「もう少し基礎的な学習をきちんとできるようなところに魅力を置かないと愛知県の教育のよいところが失われるのではないか」というご意見もありました。それから、ここではあまり書かれていない外国人の生徒の問題も、これから非常に大きな問題になるので、10 年後を見据えると、むしろ積極的に教育をして、日本の活力にできるかということは、これからの日本の国としての課題だと思います。せめてこれくらいはビジョンの中に盛り込んだ方がよいと思います。次回は、もうすでに、ある程度のビジョンの提案のたたき台が出てくるとうかがっていますので、そのあたりもう少し重点を置いた書き方にしていただきたいと思います。この魅力ある高校教育の充実がビジョンの中核であると思いますので、今日意見が出しきれなかったという方についてはメールで結構ですので、意見を出していただきたいと思います。前回の内容にも盛り込みながら提言のかたちにするときには生かしたいと思います。では議事はここまでにしたいと思います。

〔教育長閉会挨拶〕